

第一編 自然環境

第一章 位置と沿革

位置

鹿児島市は日本の最西南部、九州の南端近くにあり、薩摩半島と大隅半島を分かち鹿児島湾(錦江湾)の西岸の中央よりやや北部にある。緯度は市役所において北緯三二度三五分、経度は東経一三〇度三三分である。その位置は鹿児島県の中央に近く、鹿児島湾にももぞんで水陸両面からすぐれた位置にあると考えられるが、しかしここが地方の中心になったのはそう古いことではない。すなわち石器時代の遺跡をみると、当時から人類の居住は行なわれていたようであり、その後も平地の開発が進められていたようであるが、しかし古墳の分布からみると、当時の中心は大隅半島中部の肝属平野にあったようであり、また国郡制の時代も薩摩、大隅両国の国府はそれぞれ現在の川内市と国分市内にあって、当時はまだ鹿児島市の位置は地方の中心とはいい難かった。また島津氏が守護となり、はるばる赴任した当時そのまずはじめの住地は出水平野西部であった。

このように歴史開幕以後しばらくは、現在の鹿児島市の位置は舞台の中心をはずれており、地方豪族の根拠地にすぎなかった。しかし島津家五代貞久によって鹿児島に島津氏の拠点ができ、守護町としての発展

鹿児島島の発
展

が開始された。以後約二五〇年の守護町時代において、鹿児島は地方の中心としての役割りをおびて来て、その発展はいちじるしかった。さらにまた島津氏の三州統一が完成すると、鹿児島はますます地方の中心としてその機能を發揮し、江戸時代も薩藩の中心として城下町の完成をとげるのである。

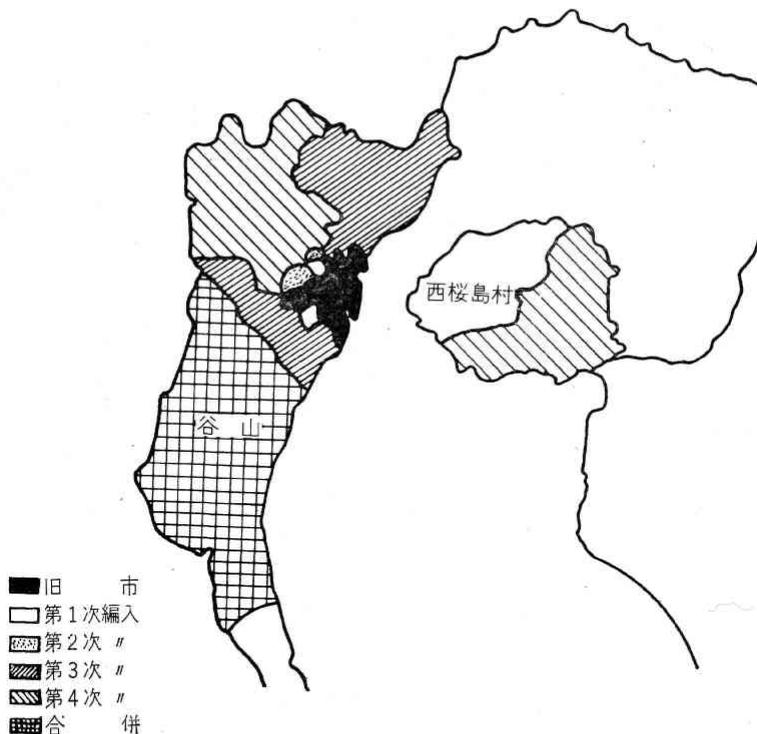
明治以後鹿児島県の県庁所在地になったのは当然であるが、しかし、藩制時代におけるその大中心としての位置を継承して、今日まで県下において群をぬいた大都市である。谷山市との合併前の人口約三三万をとつても、第二、第三位の鹿屋^{かのや}、川内両市とくらべ、その約四倍半になる。このように同一府県内において一つの市が圧倒的優勢さを持つということは、そう例の多いことではない。この点において鹿児島市の県下における重要性を知ることができる。しかもなお、谷山市と合併、さらに北方まで鹿児島灣岸を連ねた大都市の構想がないでもない。

将来の問題

一方において、日本の中央から遠いことの不利さ、資源の貧弱を反映して、市は近代的商工業都市としての資格が弱いという欠点がある。しかし、昭和三十年以降減少しつつある県人口の大勢のうちにあつて、こゝくわずかの増加人口を持つ市町村の一つであり、その代表である。鹿児島市の発展は、県の中心としてその発展とつながり、また逆の関係も存するが、それだけに市民の努力によつて市の発展が期待されなければならないであらう。

第1図 市域変遷

第一章 位置と沿革



第1表 市域と人口の変遷

事項	年月日	市町村名	面積 (<i>km</i> ²)	人口	人口密度 (1 <i>km</i> ²)
市制施行	明治22. 4. 1	鹿児島市	14.03	57,822	4,121
埋立新設	" 39.11.19	洲崎	14.11	59,784	4,237
第1次編入	" 44. 9.30	伊敷村の一部(草牟田) 西武田村の一部(武)	15.91	73,085	4,594
第2次編入	大正 9.10. 1	伊敷村の一部(原良、永吉玉里)	16.73	103,180	6,167
第3次編入	昭和 9. 8. 1	中郡宇村、西武田村、吉野村	78.25	176,900	2,261
第4次編入	" 25.10. 1	伊敷村、東桜島村	181.54	229,462	1,264
合併	" 42. 4.29	谷山市	279.15	385,866	1,382

(注) 昭25年の面積は昭30年10月1日で180.58^{km}に修正された。
谷山市合併時の人口は、昭42. 5. 1 現在の推計人口

第二章 鹿児島市の地質と地形

I 鹿児島県の地質と地形

四万十層群
の山地

阿多・始良火山以前 鹿児島市の地質と地形をみる前に、一応県のそれについて概観してみよう。

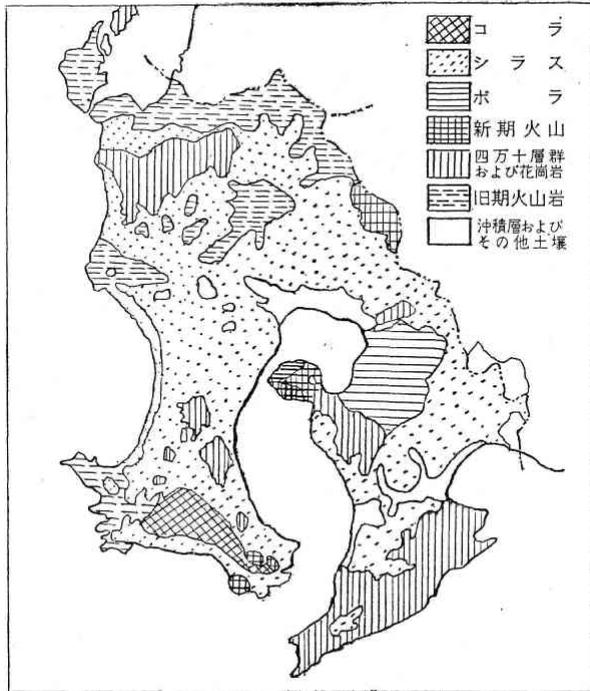
まず鹿児島県の基盤となっている岩石は、四万十層群といわれる時代未詳中生層である。これは紀伊半島南部、四国南部および九州南部、すなわち中央構造線より外側を構成している岩石の一部で、鹿児島市の沖積平野部もボーリングをすれば、地下数百メートルの深さにこの岩石があり、県下一帯の地下はかなり広くこの岩石で構成されていると考えられる。しかし、この岩石で構成されている地形、すなわち、地上部の形態は鹿児島県下の部分と、より北東方の宮崎県以北とは、かなり違っている。すなわち、北東方の九州山地主要部および四国、紀伊山地、いわゆる外帯山地においては、この岩石は北方の古い岩石の地帯（古生層および変成岩帯）と一体となつて、前記の山地を構成しているのに対し、鹿児島県ではこの四万十層群の地域が断裂し、紫尾山地・薩摩山地・高隈山地・肝属山地などの小山塊となつて、県下各地に散在している。すなわち、他方では四万十層群はひとつづきの峻峻な地域をつくっているのに対し、県内では各個別の小山地となり、中間に凹地をつくっているのである。

ところが、第三紀の末から第四紀のごくはじめにかけて、前記の凹地にいろいろの火山活動を生ずるに至つた。そのまずはじめは今日の薩摩半島北部から南部へかけてのいわば旧期霧島火山帯の活動で、この活動

火山活動

阿多始良火山の活動

によつて、肥薩国境や蘭牟田火山付近、あるいは市北部の吉野台地から西に半島を横断する火山を生じた。



第2図 鹿兒島県の地質

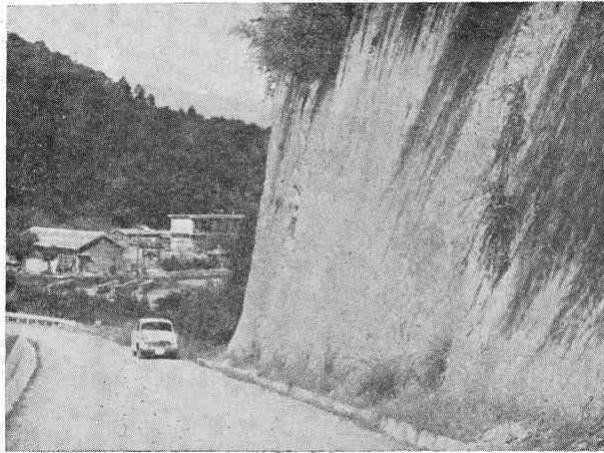
しかし、これらの火山は、古い火山なので成立後かなりの浸食をうけ、今日ではあまり火山らしい原形をとどめていない。

阿多・始良火山の活動とその後の変化

次の時期の火山活動は、鹿兒島県にとつてもっとも重要な火山活動です。すなわち阿多（指宿）および始良火山の噴出およびカルデラの形成である。

前述までの活動によつて四十層群山地の中間地域は、火山でうずまいたがしかし、なお取り残されたかなりの地域があった。その最大なものは、ほぼ現在の鹿兒島湾に相当する部分で、南北にかなりの大きな地溝のようなものがあつたと思われるが、しかも当時はまだ霧島火山がないため、地溝の範囲は、北は現在の加久藤盆地北縁に達する大きなものであつたと思われる。

また西の薩摩半島においては、北薩^{ほくさつ}火山地域と南部の四万十層群より構成されている薩摩山地の中間に、薩摩半島を東西に横切る凹地があったと思われる。



シラスの崖

以上の凹地のうち、現在の鹿児島湾口に当たる部分に阿多（指宿）火山、湾奥に当たる部分に始良火山の大活動があり膨大な量の軽石流を噴出させた。これは軽石の細粉に軽石塊およびその他の岩石の角礫^{かくれき}を混じたもので、これらが噴き上げられ降下して地上に堆積^{たいせき}するとともにまた地表を流れた。このような噴出形式の結果、その堆積物として軽石、角礫を含む軽石の砂状堆積物すなわち軽石角礫凝灰岩と、またその中に高熱のため溶結された溶結凝灰岩とができた。そしてこの軽石流は何回も流出しており、複雑な重なりあいを示している。この軽石流の非溶結部は、白くてサラサラしている砂状物質なので、俗称シラス（白砂または白州）とよばれるが、しかし世間は類似の白い砂状のものも広くシラスとよぶこともあり、したがって俗にシラスとよばれるものは、これを科学的に分類してみると二〇余種におよぶともいわれている。そこで科学的にはシラスという俗語を用いぬ方がよいという説もあるが、しかし、シラスという語が広く用いられている

は主として最上部の非溶結部なので、以後便宜的に使用することもある。

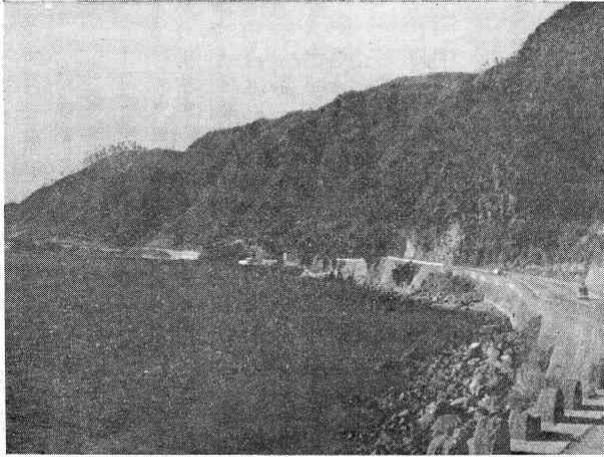
ところで、このような膨大な量の軽石流が噴出し、現在の鹿児島下の約半分と宮崎県の約二〇%の部分を埋めた。そしてこれは本来火山噴出物なので、火口を中心として四周に流れ、その結果として、火口を中心とする同心円状の等高線を持つ火山体をつくる筈であるが、阿多・始良火山の場合はそう簡単ではなかった。この理由はすでに四万十層群や旧期火山岩山地があつたので、噴出物はその中間部を流れて埋め、前記山地が障害となつたためである。このような状態であつたため、ゆるやかながら火山らしい斜面を持つているのは、大隅方面だけで（これも大隅軽石流という最も新しい軽石流流出の結果とも思われる）、他の部分では後述するように、一応は台地であるが、表面の高低は、場所によつてかなり複雑な上下を示しており、また旧期山地に近いところでは、軽石流がこれにのし上がつていような地形を示すところもある。しかし、要するに阿多・始良火山の活動は、数回もの軽石流の流出よりなる複雑なものであり、その地形もまた単純な通常の火山とも異なるが、総体としてその地形を見れば、最高約四〇〇メートルから、最低一〇メートル前後までの台地をつくつており、これが鹿児島県から宮崎県南部に広がつており、シラス台地とよばれているものなのである。

カルデラの
形成

このような膨大な量の軽石流の噴出の結果、噴出源近くの地下に空洞を生じ、したがつて、円形の陥没を生ずるのがいわゆるカルデラであるが、阿多・始良火山の場合もこの状態で、鹿児島湾口および湾奥に、それぞれ東西二五・五キロ、南北一二キロ、東西二三キロ、南北一七キロの大きな円形陥没地を生じた。さらにまたこれらカルデラを南北に連ね陥没が起つたが、この結果現在の鹿児島湾の湾入を生じたのである。

新しい火山活動

さらにまた新しい火山活動が、この鹿児島湾の陥没地帯に沿って生じた。すなわち霧島火山や桜島、開聞岳などの噴出がそれであり、その活動はとくに桜島において現在まで続いている。桜島の位置は始良カルデラの南縁であり、開聞岳は阿多火山の同じくへりなので、これらはそれぞれのカルデラの寄生火山とも考えられる。これらの火山の噴出物は、県下における最も新しい噴出物として地表をおおっており、またその中にはボラ・コラなどの不良土壌となっているものもある。



壁デラカル火山良始

II 鹿児島市の地質と地形

概観 さて、以上のような県の地質、地形から鹿児島県をつくっている岩石を大分すると、

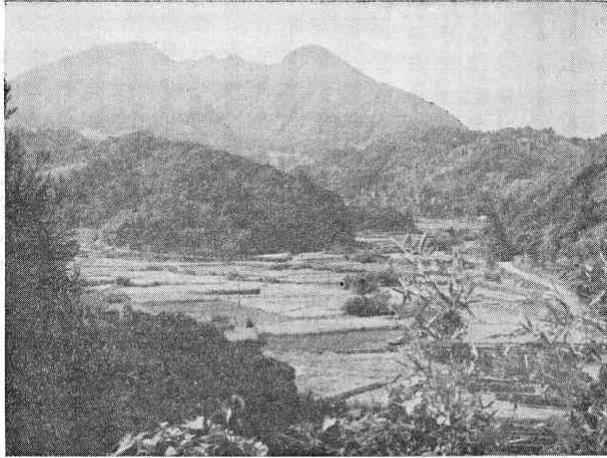
- 一、四万十層群およびこれを貫く花崗岩
- 二、旧期火山岩類および同時代の水成岩
- 三、阿多および始良軽石流
- 四、新期火山とその噴出物
- 五、最も新しい沖積層

などである。そしてこのうち、鹿児島市に最も関係の深いのが、三のうち始良火山軽石流であり、また五

県の主要岩

三重岳

の沖積層である。一の四万十層群は合併した谷山市南部には露出するが、旧鹿兒島市には関係がすくない。ただし、前記のように市内沖積層の地下深くにあり、しかも温泉に関係ありといわれているので、見方によ



三 重 岳

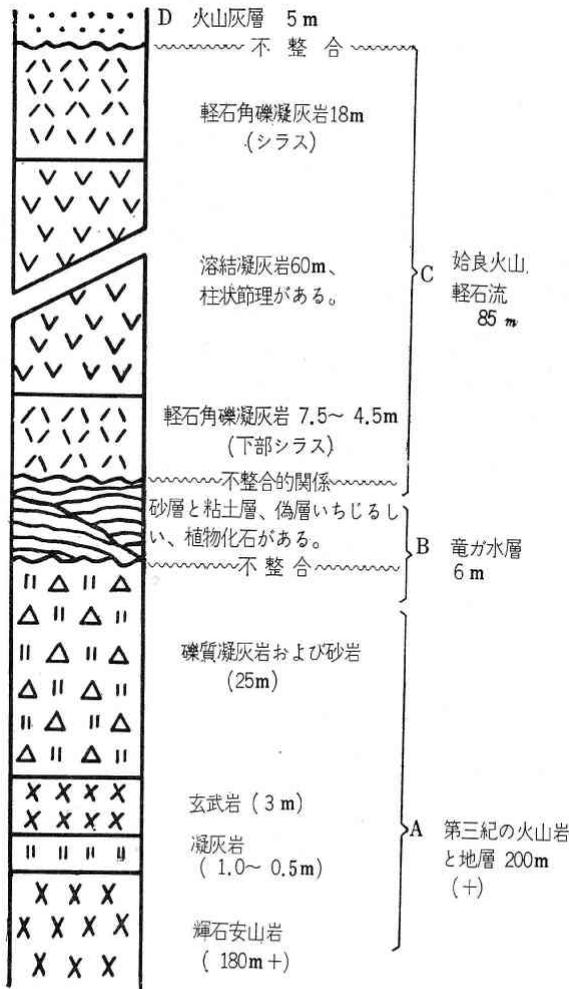
つては重大であるが、ここでは詳述を省く。二の旧期火山岩類は市内において山体をつくっているのは、北境の三重岳^{みえ}であり、地上ではわずかな部分であるが、吉野台地においては下部を構成しているので、やや重要である。また水成岩類は化石を含んだものが、各地の整石流下部に存在する。また四は桜島火山として市の東部をつくっている。

以下鹿兒島市の地質、地形を述べるに当たって必ずしも地質、地形を明瞭に区分せず、また一応は地質的な古さの順序に従いながら、一方では歴史的な発展を考慮しながら述べることにした。鹿兒島市においてはとくに必然性はないが、地質、地形にある程度その歴史的利用状態が照応すると思われるからである。

台地の地質と地形 既述のように、鹿兒島市のほとんど

全部はいわゆるシラス台地によって占められ、これに沖積平野が加わる。例外は北境の三重岳だけで、これは吉野台地の下部層と同じく旧期火山岩の輝石安山岩および凝灰角礫岩などでできている。八重山は高さ

は四八六・一メートルで独立した山地をつくっており、周囲を二〇〇メートル余のシラス台地で取り巻かれ島状をなしている。鹿児島市に属するのはわずかにその南の四分の一くらいである。



第3図 吉野台地の地質 (「かごしまの自然」より)
 (厚さは上原一竜ガ水における1例、湊による)

吉野台地

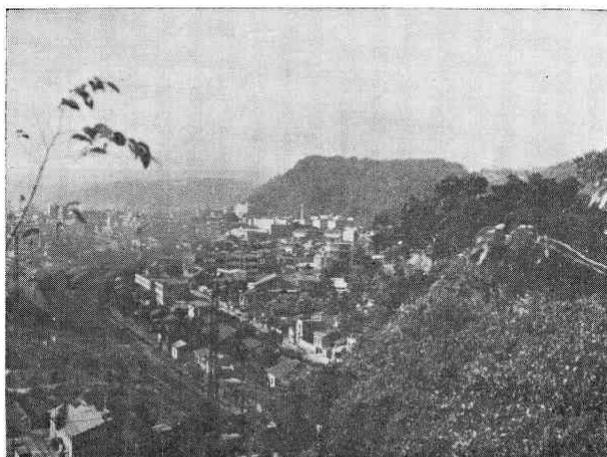
シラス台地について述べると、まず北東部に吉野^{よしの}台地がある。高さは北東部が最も高く約四〇〇メートルを示し、西南方へ次第に低下している。台地とはいえ、表面は全く平坦ではなくゆるやかに波うっている。

東部および南部は、比高四〇〇ないし二〇〇メートルの急涯をもって鹿児島湾にのぞむが、これが始良カルデラ壁の一部である。また西部は楢木川かきの谷で一応区切られるが、後述するように楢木川の西部も実は同様の台地である。

吉野台地の地質は「鹿児島島の自然」によると別表の如くである。(鹿児島県地学会編人夏)すなわち、最上部は数メートルの新期火山灰層におおわれ、その下にいわゆるシラス、すなわち始良火山軽石流の非溶結部があるが、その厚さは北東部では薄く、西南部に行くにしたがって厚くなっている。その下に始良溶結凝灰岩があり、またその下は下部シラスといわれる非溶結部になっている。これら軽石流の下には竜ガ水層りゅうがみずといわれる砂と粘土の層があり、この層は偽層がいちじるしく植物化石を含む。その下は上部に礫質凝灰岩や砂岩、または玄武岩などをのせた第三紀の火山岩で、輝石安山岩などよりなり、厚さは場所によつては二〇〇メートル近くになっている。

このように吉野台地は、台地そのものが高いのみならず、始良火山軽石流以前の岩石がよく見られるのが特色である。さらにまた上部を構成する軽石流の非溶結部は、透水性が大きく、したがって広い台地上では水を得にくい。すなわち地下水は、非溶結部を透過し、下層の溶結凝灰岩上面にとどまり、地下水面を形成する。そこで水を得るには、この地下水面まで井戸を掘るか、または谷が溶結凝灰岩を切った地点の湧水ゆうすいまで坂道を下らなければならない。事実、吉野台地の住民は、用水に苦しみ、戦前は雀力宮すずめがみや・帯迫おびざしなど一部住民は水道をつくつたが、その利用者はすくなく、ようやく戦後市に合併され、市水道の敷設によつて、ようやく水の不便を解消したのである。

吉野台地の西部は、精木川の谷によって限られ、広い台地面は一応終わったように見える。しかし、西部も吉野台地の延長の台地であり、ただ谷によって細かくきざまれているだけである。ただ台地面の高度は、単純に西方に下っているのではない。すなわち、台地面高度は、吉野台地東北部において最も高く、それから西南に低下するが、これは吉野台地東縁がカルデラ壁である

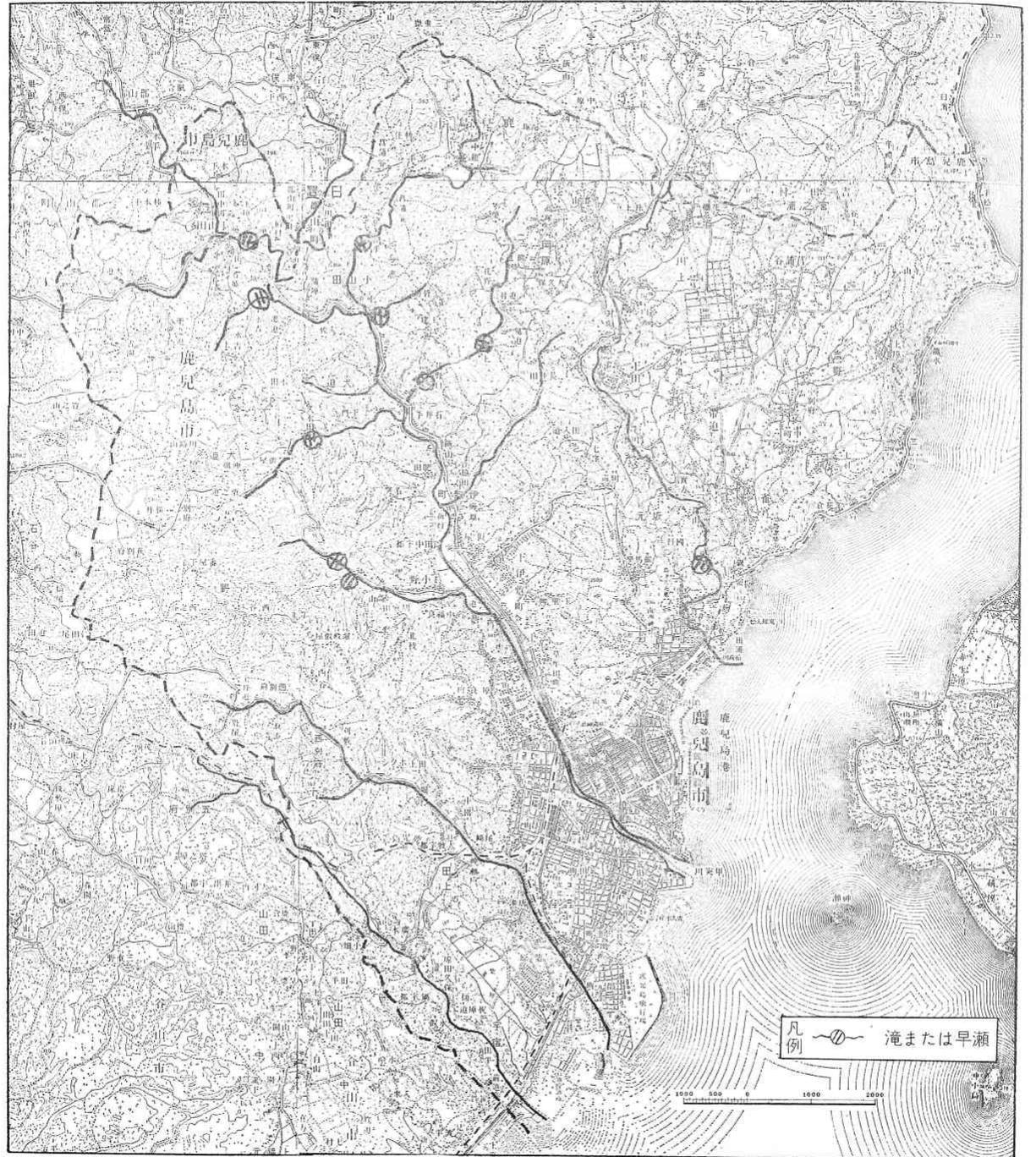


城山遠望 (多賀山公園より)
(城山がシラス台地の末端であることがよくわかる)

ことから当然である。そして精木川をこえても、高度はなお下り一六〇メートル前後になる。(この部分の南端が城山である)とところがこの付近、すなわち精木川と甲突川との中間に当たる北西—東南方向の線を境として、台面高度はふたたび西南に上昇しはじめる。そして鹿児島市西境の横井原付近の一九〇メートル付近に至るのである。市の範囲は、ここまでであるが、台地はふたたび西に低下しはじめ、薩摩半島を横断して東シナ海に至るのである。

河川と河谷の性質 以上のように市をつくる台地の地形は、それが火山体の一部と考えるに於ては、不思議な地形をしているが、また、ここを流れる川にも特色がある。

すなわち、もしこの地区が始良火山火山体の一部であるならば、ここを流れる川は、火口を中心として放射状に流れる筈である。ところが実際はむしろこの方向に直



鹿兒島県

鹿兒島市

鹿兒島港

凡例 滝または早瀬

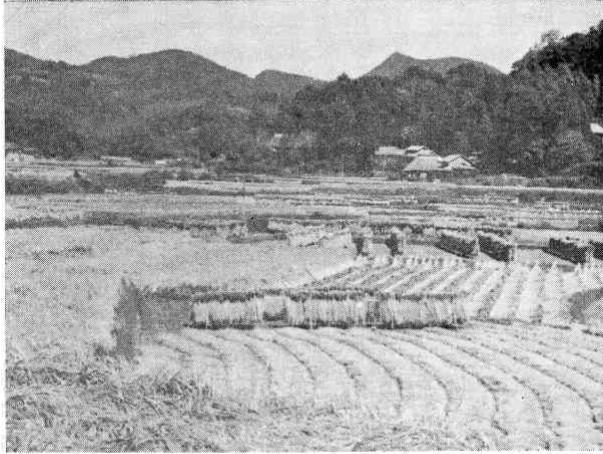
1000 500 0 1000 2000

河谷の性質

角に、すなわち精木川にしろ、甲突川にしろ、北西から東南に流れ、鹿児島湾に注いでいる。その南の田上川（下流平野部は人工流路）脇田川も同様である。これが台地面の形状が原因か、河川が原因か、なお研究を要するところであるが、通常の火山体と考えるには不思議な事実であり、恐らくは軽石流の溶結部、非溶結部などの配置にも複雑に左右されているのであろう。要するに、市内の地形の大部は、始良火山軽石流によつて構成される台地と、これを刻む谷によつてなりたつており、台地はある部分は原形をよく残しているが、多くの部分では谷の発達によつて分断され、丘陵状または細い尾根を残すのみになっている。

ところで、生活の舞台ということになると、やはり重要なのは、台地面より河谷である。縄文式遺跡は台地面にすくなくないが、弥生式以後の生活は、河谷を中心に行なわれたと思われる。しかも後述するように鹿児島市の沖積平野は、これだけの市としては小さいので、それだけに、歴史上人類活動の舞台としての台地と、その河谷の役割りが大きい。そしてまた河谷にもいちじるしい特色がある。それは市内には、甲突川をはじめとして、非常に小さな滝や早瀬が多い。まず甲突川本流についてみると、河頭に早瀬があり、その高度差は早く発電に利用されるくらいであったし、また、より上流の小山田にも滝がある。さらに、支流の花野川・比志島川・川田川・犬迫川・永吉川などにも、それぞれ滝がある。精木川も実方付近までの谷底は、ほぼ平坦であるが（しかし細かくみると中間に段がある）、これより下流は急に低下している。このような小さな滝の存在は、実は県下一帯の特色であるが、市もまた例外ではない。そしてこのような河谷の特異な点は、このような滝と滝とはさまれて水田のある平坦な谷底がつづき、いわば一種の袋谷をつくっていることである。すなわち、河谷を下流からさかのぼって行くと、谷がせばまって峡谷となり、ここに滝または

早瀬がある。さらにそこをさかのぼると、突然に眼界が開け、平坦な谷底があらわれ、広い水田が展開する。この平坦な谷底は、実はまわりはそう高くないシラスの台地ではあるが、しかし、一見切り立ったがけで周囲地区から区別され、とざされて独立した一個の小天地である。川を下るには峡谷と滝があり、隣の谷へ



シラス台地中の盆地（袋谷）の景観（比志島）

は小さな峠をもつて通ずる。これが実は中世頃の小豪族の絶好の根拠地であった。すなわち鹿兒島の地方に豪族が蟻踞した頃、その位置はまず海岸に面した台地ないしは丘陵地であった。東福寺城とうふくじじょうしかり、催馬楽城せまらくじょうしかりである。次に主要な川の河谷がある。伊敷いしきとか田上たがみとかがそれである。しかしこれらは他の地方にも例のある普通のことであるがシラス台地のある鹿兒島の特色は、台地内に上記のような谷底盆地のあることであった。ここに川上・比志島などがたむろしたのである。

では以上のような袋谷の成因は何かといえ、これについてはお明らかにしなければならぬことが多いが、およそ、二つの考え方があつた。一つは上記のような平坦な谷底が溶結凝灰岩の上面に形成されるとする考えである。

これは前記の滝が、おおむね下層の溶結凝灰岩の上にかかっていると、そう考えられるのであるが

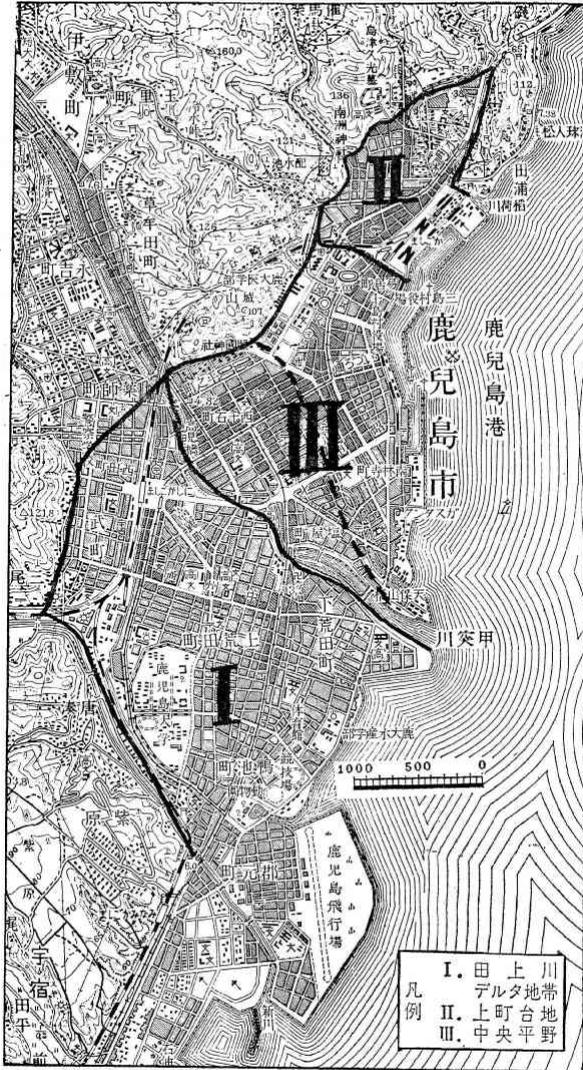
概観

吉野台地において述べたように、一般にシラス台地の構造は最上部に軽石流非溶結部があり、これは軟弱粗鬆そじょうであり、浸食されやすい。その下層に溶結凝灰岩があるが、これはやや堅硬で、浸食に対し抵抗力となる。そこでシラス台地を流れる川は、まず非溶結部を急に下刻し谷をつくるが、溶結部に至って浸食がにぶくなり、その境に滝を生ずるのである。そこで、このように軽石流の溶結部と非溶結部の浸食抵抗力の差異が、上記のような袋谷をつくるという考えである。

ところで、以上の説の難点は、前記の各袋谷の谷底高度はかなりよく一致し、概して同じ高さにある。ところが、溶結凝灰岩の上面の高さは、場所によってかなりまちまちで、一定していない。したがって、場所によっては、河川が溶結部に切りこんでいるところもある。したがって、溶結凝灰岩が浸食に対する抵抗力となったことは、確かであるにしても、実はそのみが原因ではなく、過去にある高度の浸食基準面がつくられたのではあるまいかということである。以上、二説については、それぞれ興味ある問題を提供しているが、しかし、その真の解決については、今後の研究をまたなければならぬ。

沖積平野 前述のように、鹿児島市面積の大部分をしめるのは、シラスの台地であつて、かなり多くの他の都市のように沖積平野の面積はそう広くない。しかし、なお甲突川をはじめ、田上川・精木川（下流はいなり稲荷川）・脇田川などの河川が、鹿児島湾に流入し、河口に三角州をつくっている。そして面積の大小にかかわらず、この沖積平野は歴史上やはり重要な意味を持っている。そこで次に沖積平野について述べるが、ただ一言加えることは、この項には低い段丘状台地を含めているということである。すなわち、鹿児島市の沖積平野といつても、実はその山麓との境に数メートルの低い台地を付属させている。その地形学的性質に

については、なお多くの研究を必要とするが、しかし、その利用上の意義からいうと、それはシラス台地に属するというよりもむしろ、沖積平野に関係が深いのである。そこでここでは地形面としては、一応断絶して



第5図 沖積平野の地形区分

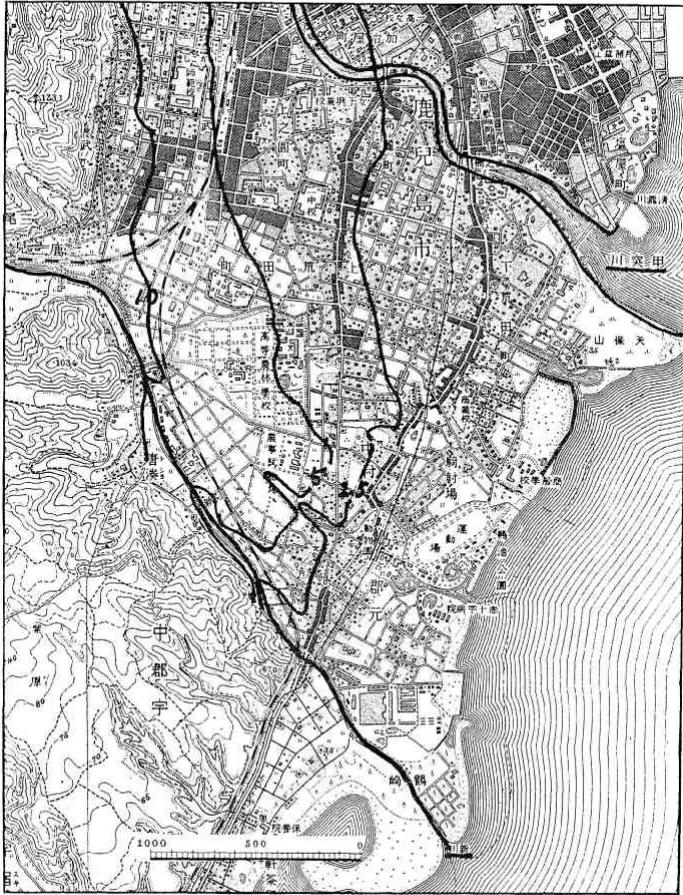
はいるが、この台地（段丘）をこの項に含めて述べることにした。

田上川デル

（I）田上川デルタ地帯 鹿児島市の平野を考える場合、従来主としてここを甲突川のデルタと考えるのが

タの地形

ふつうであった。筆者もそういういい方をしたが、しかし実はよく観察してみると、後述するよ
うに、甲突川のデルタのしめる範囲は、そう広くはなく、田上川の扇状地性三角州のしめる面積と意義が、



第6図 田上川デルタの地形

案外に大きいと思われるのである。以下は市の沖積平野を地形面に区分して述べるが、しかし、その区分は

単純に地形的であるのではなく、同時に歴史的な意義を持つてくることは、以下に述べる如くである。

田上川は武丘たけのおかと唐湊とせとの中間においてシラス台地内より平野に出て、現在の流路は、谷口より南東に折れ鹿兒島湾に注いでいる。この平野部の下流の新川しんがわは、文化三年につけかえられた人工河川であり、それ以前はより北方を流れていたといわれるが、林吉彦、鹿兒島の史蹟四九頁、しかし、実は甲荒以南の上荒田うえあたらた・下荒田しもあたらた・鴨池かもいけの

地区は、田上川の扇状地性三角州であることは、等高線を一見すればわかることである。すなわち、二万五〇〇〇分の一地形図をみると、五メートル、二・五メートルの等高線が田上川の台地からの谷口を中心とする同心円の形態を持っている。また、とくに暗示的なのは道路である。すなわち旧山谷街道と高麗橋こうらいから鹿兒島大学付近を通り郡元こうりもとに至る道路は、何れもこのデルタを南北に走っているが、このうち、とくに旧山谷街道はまさしく前記谷口を中心とする同心円の形態を示し、かつてのデルタ前面、場合によつては、砂丘を暗示する。この地区は決して甲突川のデルタとは考えられない。

田上川デル
タの歴史的
意義

この地区を歴史的に見ると、もともと鹿兒島の発展が、守護町として北部の上町からはじまり、次第に南に移つたため、新しい時代においては、甲突川以南は町ではなく農村のままにとどまり未開発であった。町の大きさと入りまじりを見ても、甲突川以北と以南の差ははっきりしている。以上の観点から、世人はややもすると、甲突川以南地区を遅れて陸地化した低湿地の如く想像するが、これは誤りであろう。むしろ、逆にこの地区こそ、鹿兒島での最も古い平野であり、居住の中心であった。これは弥生式遺跡をみると、市内では上町の台地とともに、このデルタ南部、すなわち、一宮神社を中心とする地区に分布することからもわかり、さらにまた、郡元とは国郡時代の郡の中心であり、そしてまた荒田は実は江戸時代の荒れ田ではなく

上町台地の
発展

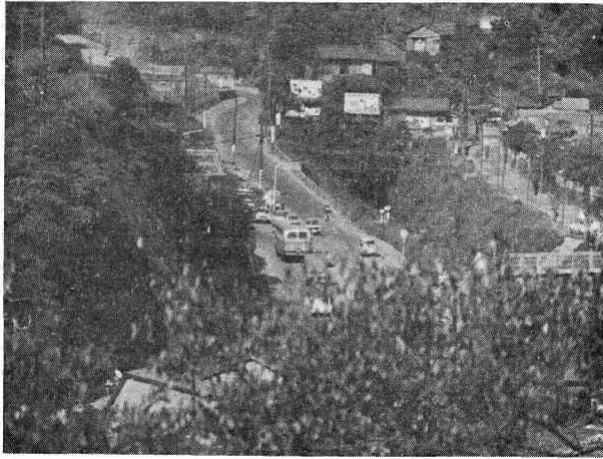
古く開拓された新田である。このようにこの地区は、鹿児島島の古い開発地区であり、中心であった。そしてその理由は、この地区が田上川の扇状地性三角州であり、必ずしも低湿とはいえず、むしろ開拓しやすかつ

たことによる。

(Ⅱ) 上町台地 かんまち 上記のように、鹿児島島の最も古い開発地区は、南部であるが、これが守護町時代に入ると、北部上町地区にとどぶ。これはこの地区が低い台地(段丘)地帯であるからである。

庄園制時代、島津庄の中心は都城みやこのじょうであった。また島津氏が守護として赴任した際、そのはじめの住地は、出水平野西部であり、鹿児島平野の付近は、前記の台地内部を含めて、諸豪族の蟠踞するところであった。しかし、島津家五代貞久は、東福寺城・催馬楽城に矢上氏を攻め、これをおとし、以後東福寺城を根拠として経略につとめ、守護町形成のもとを開いた。

○号線で市内より磯に向かう途上、市電清水町しみずわちようの終点付近の右側の丘が、東福寺城のあった丘であるが、これは反対側琉球人松側で露頭がみられるように、主として始良火山軽石流より下部の諸地層で構成されてお



上町台地東端

上町台地の
地形

り、すなわち北部の吉野台地が南に突出した一尾根である。これに対し、左側の丘陵は、いわゆる下部シラスで構成され、右側とは対比される地層の高度が違ふ。地質、地形学上問題の存するところであるが、何れ

にしてもこの地区は、標高三七・七メートルを最高とする丘陵と、これから西に春日町につづく高さ一〇メートル前後の台地よりなる。その中を稲荷川が屈曲して流れ谷を刻んでいるので、台地は多少分断されているが、しかし大童だいらゆう小学校を中心とする一帯は、明瞭な台地面を形成している。

もともとこの地区は、弥生式の時代すでに集落が形成されていたことは、かすがちよう春日町・若宮神社の遺跡からわかることであるが、島津氏以前における矢上氏の東福寺城・催馬楽城は、ちょうどこの地区を東西両翼からかかえこむような位置にあつた。東福寺城を攻略した貞久は、ここを拠点としたが、その子元久は清水城に移り、さらに貴久の時代内城に移り、貞久以後約二五〇年上町地区に



東福寺城跡遠望

(正面丘陵の左方にある。右方突端は多賀山公園)

上町の歴史
的意義

守護町が形成されるのである。内城は現在の大童小学校のある地点、すなわちおそらくは海岸線を前面にひかえていた低い台地である。しかし清水城の位置については異説があり、通説の稲荷神社背後の大興寺ガ岡

というのに対し、清水町の高地一帯という林吉彦氏の説考古学上より見たる清水城址昭和七年もある。元久は東福寺城が狭いため、清水城に移ったというが、何れにしても、東福寺城から清水城へ、さらに内城への位置の変化は、やはり山城から平城へ、戦鬪の拠点から統治の場所へという移りかわりを示して興味深い。

(Ⅲ)中央平野 前述のように、鹿児島市を流れる河川としての甲突川の意義は大きいが、しかし、その形成するデルタの範囲は案外せまい。しかし、歴史の舞台は、次第にこのデルタにも広がってくる。

守護町としての上町地区の期間は、およそ二五〇年に達するが、一九代家久に至り、上山城(現鶴丸城)に移る。その時期が、ほぼ島津氏の三州統一に照応するのも興味深い。島津氏が南九州の雄として地歩を占めると、上町地区も手狭になったのであろうし、また一方からみると、甲突川デルタも次第に形成されて来たのであろう。むしろ、川としては大きい甲突川のデルタ形成が遅かったのは、やや奇異であるが、台地の上町地区は別として、南部の田上川デルタは、扇状地性が強かったのであろう。甲突川が川として大きかったことが、かえって河口付近を低湿のままに残したといえる。

甲突川デル
タ

ただ問題なのは、ここに中央平野とした地区のすべてが、単純に甲突川デルタといえるかどうかということである。すなわち朝日通り・いづる通りより南部、すなわち松原町・南林寺町を経て塩屋町に至る地区は、むしろ砂嘴なのではなからうか。したがって、天文館通りより真南に甲突川河口に至る線より西のみが、ほんらいの甲突川デルタではなからうか。甲突川の現流路は、天保末年つけかえられたもので、それ以前はより東を流れ、下流は現在の清滝川であったといわれるが、林吉彦、鹿児島史蹟四八ページこの線がほぼほんらいの甲突川デルタと砂嘴との境に近い。そしてまた、甲突川現在の下流は、甲突川デルタと前記田上川デルタの

境であつて、この位置を選んだのは、工事者の自然の知恵であらう。

ただ以上の考え方についての難点は、甲突川はもつと古くは城山山麓さんろくを東に流れ、俊寛堀しゆんかんぼりを経て海に注

いでいたという説のあることである。林吉彦、鹿兒島の史蹟四八ページ。そうすると、古い甲突川は、この砂嘴の根本を東に

横断していたことになる。しかし、これが事実であるにしても、そのような状態から次第に砂嘴が南に発達し、甲突川の流路を南に押し下げたとも考えられる。

しかし、何れにしても、この平野が一体となつて城下町時代の舞台となつた。もちろん、その間に海岸線へむかつての平野の形成、したがつて町の形成が行なわれた。もともと鶴丸城の位置が、単なる沖積平野よりやや高いことは明らかである。ここと海岸との間は、かなり狭いが、その中央付近、すなわち旧街道の線までかなり急に傾斜している。この鶴丸城の位置が何か、ただの山麓斜面か、あるいは崖錐がいすいのようなものかあるいは段丘が存するのか、なお研究を要するところである。

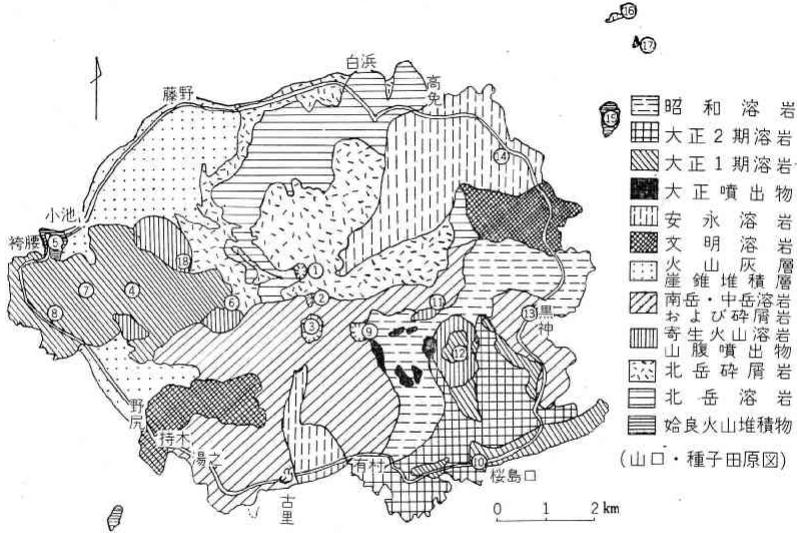
桜島の地質

桜島 桜島は始良火山のカルデラ壁南部に噴出したその寄生火山であり、またほんらいは、鹿兒島湾の陥没地帯に噴出した火山島である。しかし、大正三年の爆発の際の溶岩によつて、大隅半島と地つづきになり、現在では桜島を通つて大隅と往来できる。鹿兒島市街地との最短距離は、わずかに五キロであり、南部と東部は市に編入されているが、北半は鹿兒島郡西桜島村として残っている。しかし、市域のみを述べるのも不可能なので、桜島火山一体として述べる。

桜島が始良カルデラの寄生火山であるという証拠は、袴腰台地はかまこしにある。すなわち、鹿兒島港からの連絡船の着地袴腰港の前面には、高さ七一・七メートルの台地があり、台地面は平らで耕地になつてゐる。これは

桜島の活動

第二章 鹿児島市の地質と地形



第7図 桜島の地質 (「かごしまの自然」より)

対岸と同じく始良火山軽石流、いわゆるシラスで構成されているが、そこで、桜島火山の基盤は、軽石流と考えられ、袴腰台地は始良カルデラや鹿児島湾が陥没した際に落ち残った始良火山体の一部であると考えられる。

この始良火山南部に、桜島が寄生火山として噴出しているのであるが、桜島は単一火山ではなく北岳（御岳一一八メートル）、中岳（二〇六二メートル）、南岳（二〇七〇メートル）の三つの火山が南北に連なっている重合火山である。ほかに西側では引ひきの平ひら（円頂丘）、東側には権現山（円頂丘）、鍋山（白状火山）などの寄生火山がある。桜島は有史いらい活動の活発な火山で、くりかえし爆発の記録があり、現在も時に南岳火口から噴煙をあげている。活動の記録のうち、最古のものは和銅元年（七〇八）であるが、その後は文明年間（文明三年、同七年、同八年）の三回、安永

年間（安永八年）の爆発が大きく、それぞれ多量の溶岩を流している。また最近では、大正三年（一九一四）一月十二日にはじまった大爆発があり、東西両側で多量の溶岩を流出させ、東側では大隅半島との間の海峡が溶岩で埋まり、桜島は大隅半島と地つづきになった。また昭和二十一年（一九四六）三月十日以降も爆発があり、東側で溶岩を流し、有村・黒神などの部落を埋めた。以後しばらく静穏であったが、昭和三十年（一九五五）十月南岳が突然爆発、以後くりかえし爆発をつづけているが、溶岩は流出させていない。

桜島の現状

このように、桜島は現在も活動をつづけている活火山であり、したがって、山頂に近い部分は植生がなく岩石が裸出している。また山麓も大正期以後の溶岩地帯は、ようやく多少の土壌を生じ、マツなどの植物が生えはじめた程度の不毛の地である。しかし、文明・安永以前の溶岩地区は、すでに表面は植物におおわれ一部は耕地になっている。さらにまた、より古い溶岩の地区、とくにその上が火山灰におおわれると俗に扇状地とよばれる多少とも良好な耕地となり、ビワ・ミカンなどのくだもの、桜島大根その他の野菜類・陸稲・麦類などの作物がつけられている。しかし、桜島は新しい火山なので、降水はたちまち地下に浸透し、そのため常時水のある河川がなく、したがって水田がない。

第三章 鹿児島市の気候

I 概 説

鹿児島市の位置

鹿児島市の位置は、地方気象台において東経一三〇度三三分、北緯三二度三四分である。これからみてわかるように、鹿児島市はこれほどの都市としては日本の最西南端にある都市である。とくに南部にあるといふ点では、薩南諸島さつなんは別として、日本の他の地方では、関東地方の八丈島はちじょうしまと比べられるのみである。したがって、日本の中ではごく温暖であり、南国的であるなどといわれるのももつともである。ただし、この点をあまりにも誇張しすぎるのは正しくない。この理由は、鹿児島市が温帯のどのあたりに位置するかを考えてみるとよくわかる。すなわち、ケツペンという学者の温帯（ふつうにいう温帯からは冷帯を取っており、むしろ暖帯といった方がよい）の定義は、「温（暖）帯とは最寒月の月平均気温が零下三度から、一八度までの範囲をいう」のである。したがって、市がこの温（暖）帯に属するのはいうまでもないが、それならばその温帯の中でどの辺にあるか、すなわち、北の方に近いか南の方に近いかをみてみると、実は案外に中点よりやや北よっているのである。すなわち、零下三度と一八度の中点は、七・五度であるが、鹿児島市の最寒月（一月）の月平均気温は、六・六度（昭和六年より三十五年までの平均）であり、中点より低く、むしろわずかながら北よっていることを示す。南国的という熱帯に近い、すなわち亜熱帯とか、またはそれに準ずるように思えるが、実は鹿児島市は緯度の割り合いには寒いのである。この理由は後に述べるが、しかし

気温の特色

それにしても日本の中では温暖な地区に属することは間違いなく、この点大きな特色を持つといえよう。

年平均気温
の特色

第二表 鹿児島市の気温（他地点との比較）（℃）

地名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
鹿児島	6.6	7.7	10.8	15.1	19.0	22.6	26.8	27.1	24.4	18.9	14.0	9.0	16.8
名瀬	14.3	14.7	16.5	19.3	22.3	25.2	28.1	27.7	26.4	23.0	19.8	16.4	21.1
八丈島	10.2	10.2	12.2	15.9	19.0	21.8	25.3	26.5	25.0	20.9	17.1	12.9	18.1
宮崎	6.8	7.9	11.0	15.2	19.1	22.5	26.5	26.7	23.9	18.3	13.8	9.1	16.7
室戸岬	7.0	7.4	10.2	14.5	18.1	21.0	24.8	25.0	23.5	18.8	14.6	9.9	16.3
大阪	4.5	4.9	8.0	13.6	18.3	22.3	26.6	27.8	23.7	17.4	11.9	7.0	15.5
東京	3.7	4.3	7.6	13.1	17.6	21.1	25.1	26.4	22.8	16.7	11.3	6.1	14.7
札幌	-5.5	-4.7	-1.0	5.7	11.3	15.5	20.0	21.7	16.8	10.4	3.6	-2.6	7.6

II 気温

鹿児島島の暖かさ 鹿児島市の年平均気温をみると、一

六・八度（昭和六年から三十五年までの平均）である。

これを日本の測候点のある各地と比較すると、これより

高いのは、名瀬なせの二一・一度と八丈島の一八・一度だけ

である。名瀬が鹿児島より高いのは当然として、緯度の

高い八丈島の温度がかえって高いのは、黒潮などの影響

によるものであろう。この点から考えて、日本の中では

鹿児島が温暖であることはいうまでもなく、中央部の東

京とくらべて二・一度、北部の札幌にくらべると九・二

度も高い。そして鹿児島に近いのは、宮崎・長崎・富江

室戸岬・潮岬などであるが、九州の西部にある長崎・富

江は別として、他の地点は何れも紀伊山地・四国山地・

九州山地をつらぬるいわゆる外帯山地の外側、太平洋側

にある。すなわち、南は太平洋と黒潮に面し、外は山地

夏の気温

でさえぎられ、一括してよく南海地方といわれる温暖な地方である。鹿児島市はこの地域に属するのである。しかし、実は以上の各地点と比較してみると、それぞれに鹿児島よりかなり北にある。すなわち、前述のように、鹿児島は緯度の割り合いには暖かくはないともいえるのである。そこで、この事実より明らかにするために、気温の月による配分をみてみよう。

まず各月のうちで、最も暖かい月は月平均気温二七・一度の八月である。しかし、これは大阪の二七・八度、神戸の二七・一度などにくらべて低いし、東京の二六・四度にくらべてそう高いとはいえない。これは三方海をめぐらされている鹿児島の夏が案外涼しいということとともに、内陸的な他の地方が暑いたためである。

さらにまた夏の暑さの一面を示す気温の最高記録をみても、鹿児島はそう高くはない。大正五年いらいの記録としては、鹿児島では昭和十七年八月一日に三七・〇度があるが、日本の他の地方でこれをこえているのは、有名な山形の日本の最高記録四〇・八度をはじめとして、非常に数が多い。すなわち、最高限という点においても、鹿児島はそう大したことはないのである。

ただ鹿児島の特色とされるのは、このような気温の絶対的高さではなく、その持続性、すなわち夏の長さであろう、すなわち気象統計では、日の最高気温三〇度以上の日を真夏日、二五度以上の日を夏日とよんでいるが、この真夏日は、鹿児島では実に六八日、すなわち二カ月をこえ、日本では名瀬について二番目である。東京は四五日にすぎないし、札幌はわずか九日である。しかし、京都・大阪・熊本・佐賀・宮崎などは鹿児島とそう違つてはいない。

冬の特色

冬季の気温 次に寒い時期の気温をみると、鹿児島島の最寒月は一月で、その月平均気温は六・六度である。これは国内において、名瀬・宮崎・富江・足摺・室戸岬・潮岬・八丈島について高い。この中で名瀬が高いのは、不思議ではないが、他の地区は緯度の高い割りに気温が高く、鹿児島はその逆なのである。一方、気温の最低値は、鹿児島は零下六・七度（大正十二年二月二十八日）で、富江・足摺・室戸岬・潮岬などよりやや低く、しかも浜松・静岡などの東海地方や、東京にくらべて、そう高くない。すなわち鹿児島のは案外に寒いのである。

その他、初霜日の平均は十一月二十七日であり、終霜日のそれは三月二十三日で、日本の中央部にくらべそういちじるしく違うわけでもない。また、雪も一冬に何回かは積もり、大雪の記録としては、昭和三十四年一月十七日の二九センチがある。植物の開花日も、うめは一月二十日で、東京の二月三日にくらべ、一〇日程早い。そめいよしのは三月二十九日、東京とまったく同じである。ただ実際の感じとして、満開の期間がすこし長く感じられる程度である。ただ真夏日と同様に、冬日という最低気温が〇度以下の日は、東京の五日とくらべ、わずかに二八日で寒い期間が短いといえるであろう。

冬の寒さの理由

このように、鹿児島島の冬は案外に寒い。この理由は宮崎と比較することによってはっきりする。すなわち、宮崎は鹿児島より緯度は北にあるが、一月の平均気温は、わずかに高い。この理由は、宮崎は北西方に九州山地があり、冬の冷たい北西季節風をさえぎるからである。日本の冬の寒さは、シベリア高気圧の消長に左右されており、この高気圧が優勢になると、冷たい北西季節風が吹き出し、気温を下げる。したがってこの冷たい風を九州山地で防いでいる宮崎の冬季は、温暖でそれに晴天が多い。これに対し、鹿児島は

北ないし北西に十分な障壁がなく、冷たい風が容赦なく吹きこむ。しかし、南方にあり太陽熱そのものは高いので、風さえささえぎれば暖かい。冷たい風をさえぎった部屋のガラスの窓ぎわ、ビニールハウスなどの中では、驚くほど温度が上昇する。しかし、一度室外に出ると、冷たい季節風が吹きまくっていて、体熱を奪うのである。したがって、シベリア高気圧が衰え、季節風が静まると、冬の真中でも驚くほど暖かい小春日和の日が出現する。そしてまた以上のような状態なので、この冷たい北西風を避ける場所は、はなはだ住みよい場所である東・北・西を丘陵と台地に囲まれた上町地区は、そのような場所であるし、城山下もそうである。これに対し、冷たい季節風のまともに吹きこむ甲突川の谷などは、いやなところであろう。およそこういうところには連隊などがあつて、一月に入隊したての初年兵が泣かされたのである。

III 降 水 量

年間降水量

降水の季節配分 市の降水量は、年間合計二二三七ミリ（昭和六年〜三十五年の平均）である。これは高田・福井・金沢・富山などの裏日本各地、南の島（名瀬・大島・八丈島）、および南海地方各地（尾鷲・潮岬・室戸岬・足摺・宮崎など）よりはすくないが、国内においては、かなり多い数字であり、鹿児島島の南国性を示すものといえる。

雨の降り方、すなわち季節配分をみると、かなり特色がある。もともと日本は雨の季節配分からみて、まづ表日本地方と裏日本地方に分かれ、表日本地方は東北日本と西南日本に分かれる。裏日本地方に対し、表日本の特色は、前者が冬季の降水、すなわち降雪の多いのに対し、表日本は夏季の降水の多いのが特色である。

次に東北日本が九月（所によつては十月）の降水量が多いのに対し、西南日本は六月（所によつては七月）

第三表 鹿児島市の降水量（他地点との比較）（mm）

地名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
鹿児島	75	116	149	228	249	454	343	220	213	120	90	79	2337
名瀬	163	184	220	221	362	443	231	281	297	247	224	160	3033
八丈島	102	207	254	239	267	323	180	238	365	515	377	139	3018
宮崎	53	112	154	223	264	407	350	289	286	239	129	67	2571
室戸岬	71	115	169	225	243	337	261	247	343	254	154	95	2512
大阪	43	58	96	127	122	193	177	118	171	122	81	52	1359
東京	48	73	101	135	131	182	146	147	217	220	101	61	1563
札幌	111	83	67	66	59	67	100	107	145	113	112	104	1136

すなわち梅雨の降水が多い。鹿児島はいうまでもなく西南日本の地区に入るが、しかもその典型である。というのは前述のように東北日本と西南日本とのちがいは、六月と九月の降水量のいずれが多いかということによって区別されるが、しかし、九月に降水量の最も多い東北日本の地区でも、大部分は六月も多いのである。すなわち二つの多い月があるが、ただ九月がより多いというだけであり、西南日本の場合も同様に、六月も多いが九月も多いのである。ただ例外は、東北日本の場合九月のみが多い（梅雨が弱いので六月がすくない）北海道と、六月のみに最高の降水のある鹿児島だけである。

六月に降水量の多いのは、いうまでもなく梅雨によるものであるが、これは北のシベリア気団と南の小笠原気団の間の前線が、オホーツク気団の影響のもとに、日本付近に停滞することによって生ずる。この前線—梅雨前線は南方から徐々に北上し、これが北上しきると、梅雨

陽性梅雨

あけになる。したがって、南方各地は早くからこの前線の影響で梅雨に入り、しかも前線は北上するかと思ふとまた南下してくるので、梅雨明けも遅くなり、総体として梅雨は長くなる。この時期は鹿児島では、東京とちがつて、もうかなり暑くなっているのです、その上に雨が連続するとむし暑くないやな季節になる。ただし鹿児島のみならず、九州地方の梅雨は、いわゆる陽性梅雨で激しい降雨があるかと思うと、またそれが中断し、案外に晴天となる。鹿児島の梅雨は、ふつうにその形容に使われる「しとしと」という感じとは、ちよつと縁が遠く、しばしば、しのつく豪雨になるが、しかも梅雨明けの豪雨はすさまじい。もつとも梅雨明け豪雨が最もはげしく大きな被害を与えるのは、むしろ中および北九州であるが、鹿児島もかなりの豪雨に見舞われる。この結果、鹿児島の月間降水量は、六月で四五四ミリ、七月は三四三ミリもあり、東京のそれぞれ一八二ミリ、一四二ミリにくらべると倍をこえる。その梅雨のはげしさがわかる。鹿児島の日最大雨量の記録は、大正六年六月十六日の三〇六ミリで、これは他地方にくらべ、そう特別に多くはないが、連続雨量の記録としては、明治三十一年六月十七日から七月二十一日に至る三五日間降り続いた記録があり、その他二〇日以上上の記録は決してすくなくない。

台風銀座

台風の雨 次に鹿児島に多量の雨をもたらすものは、台風である。鹿児島はよく「台風銀座」といわれ、台風の頻繁ひんぱんに来襲する地域である。しかし、この名の本当にあてはまるのは、薩南諸島なのであるが、しかし、本土の鹿児島市も過去に多く台風が通過し、市民は台風眼中に置かれた経験をかなり持っている。台風は風・雨・高潮など、いろいろの災害をもたらすが、ここではその雨について述べよう。

台風の雨

もともと台風は南方洋上で発生し北上するが、およそ北緯二〇度ないし三〇度の地点で北東に転向し、日

本に襲来する。しかしこれは日本に襲来するものの典型的なコースで、早い時期のものは、中国大陸に直進するものが多く、後次第に転向するようになり、十一月頃のぐくあとのものは、日本の南方洋上を北東に走



豪雨による被害（昭和34年）

り去ってしまうものが多い。この結果、鹿児島に影響あるものは、概して六〇八月など早い時期のものが多い。そして降水の多さは必ずしも台風の大きさに一致せず、台風の中心が付近を通らず、案外に遠くのコースで大雨をもたらしている。降水の多さという点では、昭和六年七月十二日（三二四・五ミリ）、昭和十一年七月二十二日（二九七・七ミリ）、昭和十五年八月二十五日（二〇二・九ミリ）、昭和十八年八月二十日（三〇四・〇ミリ）、昭和十八年九月二十日（二四二・一ミリ）などが戦前の例であり、また戦後は、昭和二十四年八月十五日（ジュディス三二四・五ミリ）、昭和二十五年七月十七日（フロシー、グレース二一〇・九ミリ）、昭和二十九年八月十七日—二十日（五号二五六・二ミリ）、昭和三十六年七月二十九日—八月三日

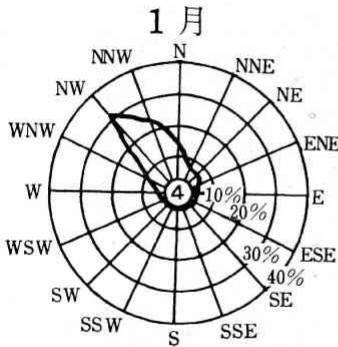
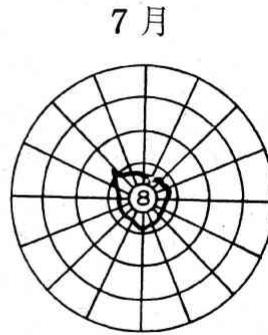
（一〇、一一、一二号三五・〇ミリ）などが、代表的なものである。

IV 風の性質

通常
の風

通常
の風

日本は東南アジアの季節風帯に属する。したがって、鹿児島も季節風に影響されるが、しか



第8図 鹿児島市の風向 (1月および7月)
(鹿児島県気象75年報より)

し風向は地形などのかかなり極地的な要素に左右されるので、簡単な一般的法則を適用することはできない。すなわち一般的には日本においては、夏季は南または東南、冬季には北または北西の季節風が吹く。たとえば東京を例にとると、九月から三月までの冬季は、北々西の風がもつとも多く、五〜八月は南風である。ところが、九州は例外が多く、鹿児島もまたこの例外に属する。すなわち、一年のうちもつとも多いのが、北西風で全体の風向の二〇%余、北々西・西北西がそれぞれ一〇%弱、北も一〇%くらいであるが他の風向は何れも五%以下である。すなわち、一年を通じて、ほとんど北西を中心とする風が卓越する。その季節的狀態をみると十月からほぼ四月までの冬季は北西風、または北風が多く、日本の一般的風向と同様であるが、五月以後はこれらの風向が減ってくるが、しかもなおそう減少もせず、しかも南風もふえない。すなわち、夏の風は、南または南西に片よらず、東西南と

割り合いに平均して吹く。以上のような事実の総合的結果が、一年を通じて北西風が多いという結果を生ずるのである。つまり夏といえども、南風や南西風がそう多くなく、この点、季節風帯の公式を破っているが、

これは地形による影響が大きいと思われる。

台風 の風

台風の風として重要なのは、台風の風である。時



強風の被害

(昭39年台風14号による 鹿児島大学教育学部)

間的には短く、また台風のおもな被害は、やはり水によるものであるが、風による被害も馬鹿にならない。市における記録をみると、明治三十二年八月十五日に四九・六メートル(毎秒、南西風)というのがある。しかしこれは台風が市を通ったのではなく、西方海上を北上、有明海を斜断したのである。すなわち、台風の公式にしたがつて北東側に当たったため、風速が大きかったので、かなりの倒壊家屋を出している。最近風の強かったのは、昭和十七年八月二十七日の三九・三メートルで、また有名な枕崎台風(昭和二十年九月十七日)は、鹿児島でも瞬間最大風速五二・〇メートル(最大風速三五メートル/

毎秒)を記録した。その他阿久根台風(昭和二十年十月十日、最大風速二七メートル/毎秒)、ルース台風

(三五・一メートル/毎秒)、昭和三十年十月一日の二二号(三二・〇メートル/毎秒)などがある。

V 鹿兒島の四季

春

春 歳時記では、春は二月四、五日の節分からはじまる。鹿兒島の過去の最低気温は、二月二十八日（大正十二年）にあらわれており、その他の年も年の最低気温は、一月末から二月はじめにあらわれているので、多少のずれはあつても、節分で冬の峠をこしたとすることに間違ひあるまい。しかし、まだ冬の寒さはきびしく、春は遠いが、しかし、二月も半ばになると、やはり気温も上り、空気中の水蒸気がふえてくる。桜島の色も、真冬の乾燥した空気の中とは違い、多少のにごりが見えはじめてくる。

春の訪れは、ふつう春一番という風によつてもたらされるが、これは冬の西高東低の気圧配置が破れ、移動性高気圧と低気圧が交互にやつてくる季節の前兆である。な・た・ねの花がそろそろ目立ちはじめ、三月末にはそ・め・い・よ・し・の・が・咲・き、四月はじめに満開になる。この頃には低気圧がくりかえし襲来、花の嵐あらしをもたらず。四月になると、南方洋上の小笠原高気圧が次第に発達をはじめ、日本の天候も次第に安定してくるが、しかし、時には前線が停滞してな・た・ね・梅雨などという現象を生ずる。鹿兒島はこの間日本の他の地方にくらべ、気温の上昇が早く、四月末には初夏を思わせる日があり、上着を脱ぐこともある。四月から五月にかけては鹿兒島のもつともよい季節であり、新学期を迎えての遠足・運動会など行事の多い頃である。

夏

夏 六月にはいると、梅雨前線が北上し、まもなく梅雨にはいる。前述のように鹿兒島の梅雨は、東京のそれとちがつて、かなりはげしい雨に見舞われる。湿度は高く気温ももうかなり上がつていたので、むしろ暑く苦しい時期である。梅雨とは梅の実のみのる頃というが、鹿兒島ではもう五月末から実りはじめています。

梅雨末期には、しばしば集中豪雨があるが、鹿児島の場合は北九州のそれにくらべると、その程度はやや軽い。しかし場所によつては、洪水などで大きな被害を受けることがある。

七月も十日になるとそろそろ梅雨が明けるが、しかし七月半ばにまた梅雨前線が南下して来て、梅雨のぶりかえしがおこることがある。しかし、梅雨が明けると、たちまち暑い夏がくる。前述のように、周囲の海や鹿児島湾は多少暑さを緩和するが、空は澄んで青く、ギラギラした太陽は容赦なく照りつける。

台風は梅雨の中からも何回かやってくる。鹿児島は日本の中でも襲来が早く、七月に一回、八月二回などがある。年間最高気温の出るのは通常八月初旬であるが、しかし台風の来ない時はまったくの晴天がつづき、干害の出ることがあつた。旬までつづく。全国と同じく二学期は九月一日からはじまり、したがって、海水浴場も八月末で閉鎖するがしかし、九月にはいっても泳ぐのには、まったく差し支えない。九月いっぱいには、やはり夏であるが、しかし、九月末ともなると、秋の気配はすこし感じられてくる。

秋 九月末からすでおのの休日の朝には、運動会開始台図の花火が、青空に白い煙をたなびかせる。九月中ではまだ暑いのが、十月にはいると、そろそろ運動会に好適な季節となる。九月末頃は時には前線が南下して、天気を悪くするが、十月にはいると、大陸方面から移動性高気圧がくりかえしやって来て、この頃しばらくは鹿児島のもっともすばらしい季節である。この状態は十一月までつづくが、十一月にはいつでも、鹿児島はさっぱり涼しくならない。常緑樹が多いので、木々はあまり紅葉せず、秋らしい情緒にはとばしいが、カラリとさわやかに晴れた青空のもとでは、戸外活動やレジャーには好適である。この期間の長

冬
いのが鹿児島の特徴といえる。しかし十一月も末ともなると、時にはにわか寒さがおとずれ、あわてて暖房機具の準備をするが、あまり目立たぬうちに冬のおとずれがある。

冬 鹿児島のおとずれは、寒くなるというより寒い日があるといった方がよからう。すなわち、間隔を置いて、ぐっと冷え込む日があるからである。しかし、ときどきは暖かさをはさみながら、寒さは次第に強まってくる。年内の雪は珍しいが、それでも時には降り、また桜島だけが雪で化粧されることもある。年もあらたまると、寒さのきびしい日のあらわれ方も多くなり、時にはかなりの降雪をみる。しかし霜のおり方も、そうはげしくはなく、道路や水道栓の凍ることはそう生じないのは、さすがに南国である。しかし、一月末から二月末にかけては鹿児島でも最も寒い時期がおとずれるのである。

〔注〕

- かごしまの自然 鹿児島県地学会編 昭和四十一年刊 年刊
九州地方（日本地方地質誌） 松本達郎、野田光雄、宮 理科年表 東京天文台編集 昭和四十二年刊
久三千年編 昭和三十七年刊 鹿児島県災異誌 鹿児島地方気象台編 昭和二十七年刊
鹿児島県の地質（二〇万分の一地質図説明書） 鹿児島 日本気候 和達清夫監修 昭和三十三年刊
地学調査研究会編 昭和四十二年刊 鹿児島県気象七五年報 鹿児島地方気象台編 昭和三十三年刊
シラスの地質学的分類 鹿児島県企画部編 昭和四十二年刊 三年刊